［調査報告］教会ベースのゴスペルクワイヤ，その現在と未来
アンケート及びインタビュー調査結果から

森 恵子
（東京基督教大学専任講師）

1. はじめに

いわゆる「ブラック・ゴスペルブーム」が日本を席捲くしてから10年以上が経つ。その間にゴスペルという言葉は音楽のジャンルとして定着し，ゴスペルクワイヤ（聖歌隊）という形態も日本人に知られるようになった。Oh Happy Day 等多くのクワイヤで歌われた曲は，Amazing Grace と同様「聞いたことのある曲」となり，クリスチャンでない人々にも好まれるようになった。この現象に注目したキリスト教会（以下教会）の中には，ゴスペル＝福音を知らしめる機会として，自らゴスペルクワイヤを立ち上げる所，会場を提供する等間接的に支援をする所が多く現れた。現在教会をベースとするクワイヤの数は優に100を超えており，今も日本各地で，ゴスペルのため初めて教会を訪れ，クワイヤメンバーとなる人々がいる。

このような教会ベースのクワイヤメンバーのうち，約7割はクリスチャンでないという統計があり，今回調査した音楽ミニストリー団体のクワイヤでも，その比率は同様であった。この比率からも，参加者の大半はいわゆるキリスト教の教えそのものに関心を抱いて，ゴスペルクワイヤに足を運んでいるわけではないと推測される。とすれば，彼らがクワイヤに参加し，継続的に教会に足を運んでいる理由は他のところにあるものと目される。本稿では，その理由を探索するにあたり，ゴスペルが英語を用いて展開されていることに注目し，教会ベースのクワイヤメンバーへのアンケート・インタビューによる，「参加の目的・目標」「英語の歌への態度」の調査を行った結果を分析し，さらに今後のクワイヤの可能性について私見を述べることとする。なお後述する塩谷（2003）には，カルチャーセンターや音楽教室を含む，日本全国のクワイヤを対象にしたアンケート結果があり，本稿はそれを踏まえた調査であることを断っておく。

2.　ブラック・ゴスペルの歴史

初めに，ブラック・ゴスペルの歴史を概観し，日本の人々がこの音楽形態にこれほどの興味関心を抱くようになった理由を探る材料としたい。以下に，スピリチュアル（ゴスペルのルーツ）とゴスペルの歴史，さらに日本に一大ゴスペル・ブームが起こった時期を簡単に振り返ることにする。実情としては，クリスチャンであってもその詳細を知らずにいることも多く，一方クリスチャンでないゴスペルファンの中には，関連する教会史・黒人教会音楽の歴史に相当詳しい知識を持つ人々もある。この食い違いもまた，現状のゴスペルのあり方に影響を及ぼしているようである。

2.1.　18 世紀から 20 世紀まで

ゴスペルのルーツについては諸説あるが，18 世紀半ばに興ったスピリチュアルと呼ばれる音楽（アフリカ各地から北米に連れてこられた奴隷たちにより作られた宗教歌）がその起源であることは，一致している。自身ゴスペルディレクター・シンガーである塩谷達也の著作『ゴスペルの本』には，スピリチュアルとゴスペルの始まりが簡潔に記されているので，この塩谷の解説に，ソウル音楽誌の特集記事からの補足情報を加え，以下に要約する。

18 世紀北米において，奴隷であった黒人たちは，白人の奴隷主たちに連れられて教会に行き，殆どの場合会堂の外で讃美歌と説教を聞き，信仰を持った。いかなる集会も禁じられていた黒人たちは，危険を冒して深夜に森の中で集い，奴隷の身分からの解放，そして魂の解放を求めて神に祈り，歌い，踊った。彼らの密かな礼拝で歌われたのは，白人の教会で知った賛美歌や聖書の言葉と，故郷の文化を融合した賛美であり，これが魂の叫びとしての「共同体の歌」スピリチュアルとなった。歌い継がれることで発展していったその音楽は，奴隷たちに希望と生きる力を与えるものとなり，やがて奴隷蜂起，奴隷制度廃止運動の推進力ともなっていった。奴隷解放が進んだ 19 世紀後半になると，黒人学校の Fisk Jubilee Singers という男女混合グループが，初めて白人聴衆の前でスピリチュアルを歌った。彼らの公演の成功により，スピリチュアル（ジュビリーとも呼ばれる）は北米全土，ヨーロッパへと広まって行った。

20 世紀に入ると，比較的小規模の黒人教会において，それまで奏楽に使われることがなかったピアノやクラリネットと共にスピリチュアルが歌われ，それがゴス

ペルの萌芽となった。しかしこれが音楽ジャンルとして確立されたのは，ゴスペルの父と呼ばれるドーシー（Thomas A. Dorsey）によるところが大きい。1920-30年代に彼が創った「ゴスペル･ソング」の数々は，ブルース，賛美歌のメロディ，スピリチュアルを融合したものであった。ドーシーが自らの曲を楽譜にして販売し，また自ら各地の教会で演奏して曲の普及に努めた結果，ゴスペル・ソングはペンテコステ派などの黒人教会に知られるようになった。1950年代からの公民権運動では，賛同する黒人･白人が共にゴスペルを歌い，彼らをつなぐ役割を果たしたため，ゴスペルは教会の外にも知られるようになった。20世紀後半には，黒人教会の牧師（とバンド）が歌のリードをとり，会衆またはクワイヤがそれに応えて歌う，コンテンポラリー・ゴスペルの形式が知られるようになり，メンバーが百から数百人のマス・クワイヤの中には，海外公演を定期的に行うほど有名なグループも生まれた。

2.2. ゴスペルの質的変化

ゴスペル音楽は大きく発展し，北米の教会と社会に影響を与えたが，その後逆の作用も起きたという指摘がある。野澤（2006）は，北米プロテスタントの白人保守派教会がコンテンポラリー・ゴスペルを取り入れた結果，21世紀のゴスペルは人種やルーツを超えた，一つの礼拝スタイルとなったと述べている。野澤の研究調査によるとまず，20世紀初頭に始まったペンテコステ運動が全米各地に広がった結果，ペンテコステ派以外の教会にもゴスペルが認知されるようになったこと，そしてゴスペルを用いた礼拝奏楽と音楽指導は「楽器を演奏できる者，指導できる者が行う」つまり，その教会に属する素人によって行われていたことが注目される。

その後，白人の保守派教会において青年層を教会に招き入れるための方策として，音楽が注目されるようになり，コンテンポラリー・ゴスペルを礼拝に取り入れるところが増えた。しかし，これらの教会ではそのリードにあたる人材がいないため，外部から音楽ミニスター（指導者）を雇い，礼拝におけるゴスペル奏者・指揮者の専門性を求めた。人材には限りがあったので，一人の音楽ミニスターが日曜日にいくつもの教会・礼拝をかけもつ事態も起きた。このようにして，伝統的に「献身，奉仕」に基づく役割だった音楽ミニスターが，洗練された技術への対価＝給料に基づく仕事へと変化し，伝統的黒人教会の「会衆参加型礼拝」のゴスペルから，白人保守派教会の「観賞型礼拝」の，プロに導かれるゴスペルが生まれたというのが，野澤の論である。

このように，ゴスペルは18世紀のスピリチュアルに端を発し，現在に至るまで北米を中心に発展してきた。一方殆どの日本人は，背景はおろかゴスペル音楽そのものを知る機会がなかった。キリスト教会に属する者の間でも，賛美歌・聖歌に収められたスピリチュアル / 黒人霊歌に詳しい者は少数であった。それでは20世紀の終わりに突然日本に訪れたゴスペル・ブームは，どのようにして始まり，発展していったのだろうか。

3.　日本におけるゴスペルの広がり

それまで日本人に馴染みの薄かったゴスペルは，思いがけない形で日本に広がった。多数の記事やインタビュー記録によると，それまで少数の音楽関係者のみが知る音楽だったゴスペルは，1993－94年に日本公開された映画「天使にラブソングを…1&2」の人気により，一気に広く知られるようになったとされる。実際，この映画が評判となった後，大都市のカルチャースクールには多くのゴスペル講座が設けられ，海外から複数のマスクワイヤ（100名以上からなる教会または地域のクワイヤ）が公演に訪れるようになった。ではこのブームの始まりについて，新聞ではどう取り上げているだろうか。ゴスペルについて掲載された記事を，年を追って調べてみた。

3.1.　新聞記事でたどるゴスペルブーム

今回参照した読売新聞の東京版・大阪版では，1989年を皮切りに，ゴスペルに関連する記事が継続的に見られる（初出は1989年12月25日東京版夕刊，「米で高まるコーラスの人気」)。1991年の記事中にはゴスペルの定義が説明されており(6月7日「黒人讃美歌と民謡の競演」，11月2日「ママ，アイ・ウォント・トゥ・シング」批評記事，ともに東京版夕刊)，翌年には，NHK-BSのゴスペルのルーツ・曲の特集番組を紹介している（3月16日東京版夕刊，「元巨人のクロマティがゴスペル紹介」)。ここまでは先行する北米でのゴスペル人気が反映された記事であるが，翌年1993年からは，日本でのムーブメントを記述する記事に変わっていく。まず4月13日の東京版夕刊には「天使にラブ・ソングを…」日本公開の記事が登場し，既に前評判も高かったためか，あらすじも述べられている。

その後，1994年に4回，1995年に1回，1997年に3回，1998年に2回，1999

年には7回，それ以降も年に2－3回のペースで，ゴスペルが取り上げられている。記事を読み進めて気づくのは，ゴスペルという言葉，及び音楽ジャンルと内容，プロ・アマチュアミュージシャンについての認知が，年を追うごとに深まっていったということだ。例えば1994年の記事では，文部省（当時）の「教育用音楽用語」の改定に伴い，ゴスペルが公の用語として使われるようになったことがわかる（12月4日東京版朝刊，「音楽用語を16年ぶり改訂　原音尊重・民族色豊かに／文部省」）。その後の記事では，時折ゴスペルの定義は載せながら，主に人気の高まりと普及を反映した，ゴスペル講座参加者へのインタビュー，各地域のゴスペルコンサートの様子などが記され，人気の高さを伺わせている。また，2000年には福岡，2001年には石川のゴスペルクワイヤの記事が登場し，人気の全国的な広がりをも示している（2000年12月7日西部朝刊，「希望の世紀　ゴスペル高らか　大野城市で17日にミレニアムコンサート」，2001年3月5日東京版朝刊，「ゴスペル，お年寄りを魅了　北陸グレースマスクワイヤ，福祉施設で披露」）。なお，クワイヤ参加者・主催者へのインタビュー記事において頻繁に挙げられているのは，ゴスペルの魅力についてであり，リズムに乗って大声で歌うとストレスを解消できる，歌で思い切り感情を表すことができる，グループで歌うと一体感・連帯感を持てる，癒しの効果がある，などクワイヤメンバーたちによる感想が掲載されている。

3.2.　ブームの後で

いわゆるゴスペル・ブームが起きたのが1995-2000年頃とすると，多くのブームがやがて「過去のもの」とされていったのと同様，ゴスペルも淘汰されていてもおかしくはない。しかし数は減少したとはいえ，カルチャースクールには今もゴスペル講座が置かれ，教会ベースまたはコミュニティベースのクワイヤが生まれ続けているという現実がある。一方では新しくゴスペルを始める人々がおり，他方では10年以上ゴスペルを歌い続けているグループがあり，一過性であるはずのブームの後もその魅力に惹きつけられる人々がいるということだ。その理由は何だろうか。

前出の塩谷（2003）には2000年頃実施された，399名のクワイヤ参加者へのアンケート結果が掲載されているが，それによると主なゴスペルの魅力は「一体感，気持ちよさ，感動（が伝わる），解放感，ストレス解消」である。また，クワイヤに参加する意義としては「楽しく自由に歌える，元気になり生きる力を得る，自分（の気持ち）を表現できる，一緒に歌う仲間と交流できる」等が挙げられている。前述の読売新聞記事においても，ほぼ同様の理由が挙げられており，これが「魅力」の

中心であったことは間違いない。

こういった経緯を念頭に置きつつ，当時から10年以上を経た現在のクワイヤメンバー達が，どんな目的や目標を持って参加しているのかを，今回実施した調査結果から見ていく。この調査においては，特にブーム当時と比べ数が増えた教会ベースのクワイヤに注目した。

4. 調査の概要と結果

2010-11年に，塩谷のアンケート結果をふまえ「教会のゴスペルクワイヤに参加しているメンバーの目的・目標は何か」さらに「英語の発音上達は参加者の目的の一つなのか」という視点からアンケート・インタビュー調査を行った。

協力を得たゴスペルクワイヤは，Hallelujah Gospel Family（HGF）という，全国の教会を活動拠点とする音楽ミニストリー団体である。クリスチャンの総合ディレクター（指導者）が統括し，クリスチャンの音楽指導者を，会場となる教会に派遣しているが，参加者については信仰や音楽経験の有無は不問のため，クワイヤメンバーの背景は多様である。

4.1. アンケート調査

首都圏4つのHGFクワイヤに，多肢選択39項目・自由記述1項目からなるアンケートへの協力を依頼し，54名のメンバー（以下，被験者）から有効回答を得た。設問のうち約4分の1は被験者の英語使用環境について，4分の1は歌う目的や目標について，そして残りは英語の発音・聞き取り等についての自己評価項目である。

被験者は主に30代以上の男女であり，4割はゴスペルを始めて1年未満である。また半数近くは定期的に英語を聞く・話す環境ではない（英語を聞く・話すのは1週間に30分以下，または殆どないという回答を選択)。ゴスペルの英語曲を歌うのが，唯一の英語使用の機会である者も，6割近くいた。

4.2. アンケート結果

以下は被験者の活動目的に関する項目である。なお答えはすべて5つの選択肢から1つ選ぶ形式である。「クワイヤに参加することの醍醐味（良さ）はなんですか」という設問に対する回答は，

(1) 歌うことで生まれる感動　20%

(2) 皆で一緒に歌う時の一体感　19%
(3) 思い切り声を出せる機会　11%
(4) よい指導者との出会い　7%
(5) 心と体の解放感（気持ちよさ）6%
（選択肢右側の数字は，被験者全体のうち，各選択肢を選んだ人数の比率）

また，「クワイヤに参加している（いた）目的・ゴールは何ですか」という設問に対しては，
(1) ストレスの解消　30%
(2) ほかの参加者との交流　20%
(3) コンサートへの参加　17%
(4) 声量・声質の変化　13%
(5) 英語曲のマスター　13%

という回答を得た。塩谷のアンケートから10年が過ぎた本アンケートにおいても，ゴスペルの魅力，参加目的共に，回答の傾向はよく似ている。なお本アンケートでは少数ながら「英語曲のマスター」を選んだ者もあった。これは，アンケートの後に任意で行った個人インタビューにおいても，複数名に挙げられている目的であった。

被験者の英語に対する考え方を見るために設けられた，「英語の発音に関するあなたの感覚は，次のどれに一番近いですか」に対しては，
(1) 外国人に通じる発音を身につけたい　43%
(2) 自分の発音の弱点を意識している　17%
(3) 将来もっと正確で自然な英語で話せるようになれると思う　17%
(4) 殆ど気にしていない（あるいは，する必要がない）13%
(5) 発音が悪くても通じればよい　9%

という結果で，「通じる英語，より正確な英語」への関心の高さを表している。ただし被験者はメンバー全体の中で，英語に関連するアンケートに答えることを選択したグループであるため，選択しなかったグループよりも英語への興味が高い可能性があり，この設問の結果を一般化はできない。

以下は，被験者の英語に関する自己評価項目である。答えは５段階のリッカート尺度により，各記述に対し１：強くそう思う，２：そう思う，３：なんともいえない，４：そう思わない，５：全くそう思わない，の中から選択する方式である。よって，数値が低いほど各記述に強く同意していることになる。

まずは，前項に続いて英語一般についての設問である。

英語全般への苦手意識がある

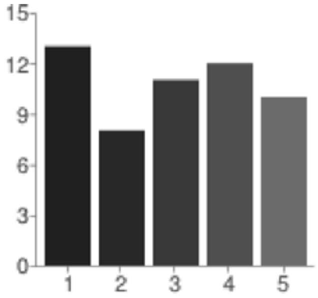

図 1

M=2.96, STDEV.P=1.44 (M= 平均 , STDEV.P= 標準偏差)

「英語は昔から苦手」な人から「英語の専門家」まで幅広く参加しているのが日本のゴスペルクワイヤであり，今回の被験者に関しても同様であることが，他の回答やインタビューからも明らかになっている。この幅広さが上記設問の回答に表れたと言える。

それでは被験者にとって，「英語の発音上達のためのゴスペル」という意識は，どの位見られるのだろうか。以下の「歌に関する目標」「英語に関する目標」は「英語の曲の練習に関する質問」というカテゴリーの下にある設問である。

ゴスペルを歌うことに関して，自分なりの目標を持っている

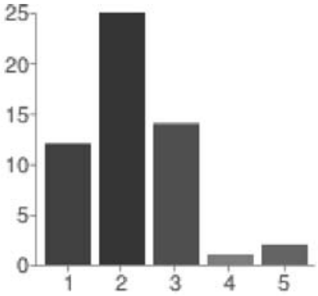

図２
M=2.19, STDEV.P=0.92

約７割の被験者は，歌に関して明確な目標があるという結果が出た。一方「英語の目標」に対する答えは，それほど明確ではなかった。

英語に関して，自分なりの目標を持っている

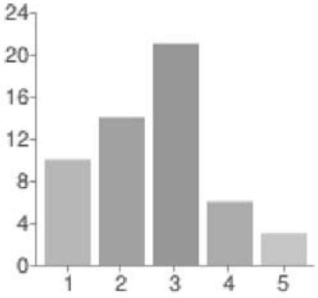

図３
M=2.59, STDEV.P=1.08 (M= 平均 , STDEV.P= 標準偏差)

英語＝歌詞の発語に関する目標，と言い換えてもよい。「歌に関する目標」に比べ被験者の答えにばらつきがある。「英語の発音上達が参加の目的かどうか」に対する直接の答えとはならないが，やや消極的な考え方の傾向を見ることはできる。

目的・目標はプロセスの中で変化することも多い。歌や英語の場合は「前より上

達したかどうか」が一つの鍵であり，自分の上達を実感するとき，その事実に後押しされてさらなる目標が生まれ，結果的にその活動が継続される，というプロセスが一般的である。では，被験者はゴスペルクワイヤで，歌や英語の発音の上達を自覚しているのだろうか。

クワイヤに参加して以来，歌に関して，自分の成長を感じている

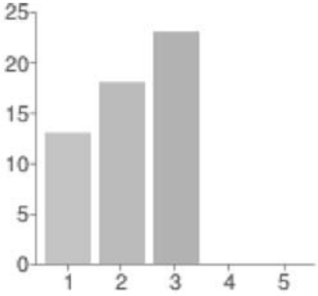

図 4
M=2.19, STDEV.P=0.80

総合ディレクターがインタビューで話していたことだが，「歌が前より歌えるようになった」という自覚が全くなければ，クワイヤの継続参加は困難であろう。よって，この設問についても当然の結果が出たと言える。なお「どちらともいえない」回答のうち，クワイヤ歴 1 年以下の者が 10 名いるのは妥当としても，5 年以上の者も 3 名おり，彼らは歌以外の理由で継続参加している可能性が高い。

クワイヤに参加して以来，英語（発音）に関して，自分の成長を感じている

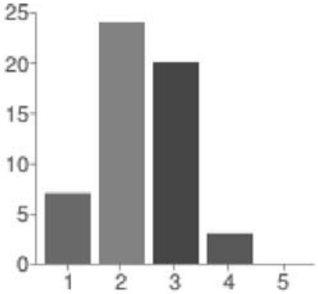

図 5
M=2.34, STDEV.P=0.77

発音の上達を自覚するという回答が約半数だが，上記「歌の上達」よりも消極的な回答数が多い。また，アンケート後のインタビューで指摘のあったことだが，普段英語を使わないメンバーにとっては，英語の上達を自己評価することは難しいかもしれない。

なお，ゴスペルを通し「歌の上達」「英語の上達」の両方を自覚している被験者のうち，英語への明確な苦手意識を持つ者が８名いる。そのうちゴスペル歴が５年以上の３名も，「英語は苦手だが歌も英語も上達した」と回答していることは，興味深い。

前述の全国アンケート調査において，参加し続ける動機として「楽しさ」が挙げられていたが，本稿では「英語で歌うのが楽しいから参加している」かどうかを尋ねた。その結果は，

英語で歌うのが楽しいから参加している

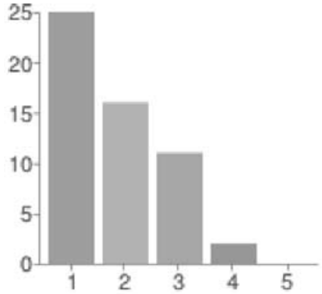

図 6
M=1.81, STDEV.P=0.88

英語で歌うのが楽しい，という意見が明らかな多数派であり，これが被験者の参加目的の一つであると言える。

なお，英語は苦手＋英語で歌うのは楽しい，という回答の被験者が 12 名あり，そのうち 7 名はさらに「歌も発音も上達している」と回答している。彼らにとってはゴスペルが，それまでの英語学習では得られなかった「楽しく，かつ上達する」機会であるのだろう。「好きこそものの上手なれ」という諺があるが，ゴスペルを歌うことが楽しくて継続参加している被験者にとって，英語の苦手意識は障害とならないようだ。アンケート後のインタビューにおいて，「アンケートに答えた後，苦手な英語なのに歌い続けたら発音やリスニングが上達していた，と気づいた」というコメントも複数あったことから，英語に関する上達は思わぬ副次効果と感じている被験者もいるようである。

4.3.　自由記述回答の概要

　アンケート結果に表れない被験者の意見を知るため，設問の最後に自由記述欄を設けたところ，54 名中 28 名から回答を得た。そのうち 5 名は「英語は苦手だが」と前置きした上で，歌うこと（賛美）の楽しさ，ゴスペルへの愛情を述べている。他にはクワイヤのメンバーやディレクターとの交流，雰囲気の良さ，歌による心の解放等のコメントが複数あった。これらはどれも，「何故ゴスペルクワイヤで歌っているのか」という問いの答えともなっている。

英語を教えている，あるいは学んでいる被験者からは，「英語の歌を歌っても英語がしゃべれるようにはならないが，発音や聞き取りは上達する」「(歌う時の）英語と日本語の感覚の違いを知った」「初めは歌を覚えるのに精いっぱいだったが，最近はテキストの発音アドバイスを参考にして歌うようになった」等の意見が出た。一人の被験者は「ゴスペルは英語の上達のために始めたわけではないのですが，英語の歌を歌うということは発音の上達や言葉のフレーズを覚えるにはとても良いと思います。クワイヤで歌うことは本当に楽しいです」と述べており，これが「ゴスペルと英語の上達の相乗効果」と言えるかもしれない。

4.4.　クワイヤディレクター（指導者）へのアンケート・インタビュー調査

教会ベースクワイヤの全体像を見るため，クワイヤの指導・運営にかかわる指導者５名にも，自身のゴスペル指導に関する考え方，クワイヤメンバーの様子などを尋ねた。その結果指導者たちに共通していた意見は以下の通りである。クワイヤは互いの技術を競う場ではなく，互いを尊重する人間関係を育む共同体となることを目指しており，それがゴスペル＝福音の素晴らしさを伝える一つの方法と考えている。

クワイヤメンバーの主な参加目的については，指導者の全員が把握していた。その中でストレスの解消・解放感については，以下のコメントがあった。「自分はゴスペルの生まれた時代の，黒人たちの歴史背景を知ることで，ゴスペルの本質を知った。私たちがゴスペルを歌って心の叫びを外に出すと，（黒人たちがそうしていたように）自分を縛っているものからの解放を得ることができるのではないか，と考えている」

また英語の発音に関しては，英語話者がクワイヤの歌を聞いて理解できるレベルを目標においており，新曲の練習では，メロディを付ける前に歌詞をリズム読みで教えるなど，様々な工夫をしていた。ゴスペルクワイヤで歌い続けることで，英語の歌と発音が上達するという「ゴスペルと英語の相乗効果」についても同意，または個人差が大きいがありうる，と肯定的な意見であった。

HGF の総合ディレクターは，「本物の英語，プロの指導」に価値を置く日本文化においては，質の高い指導に費用を払って参加することが好まれる傾向があること，一方で完璧を目指さない「ゼロ・ストレス」の雰囲気が大切であることを挙げている。

5. 考　察

5.1. アンケート結果から

まず英語に関してであるが，クワイヤメンバーである被験者たちは，学校等で習う英語と，クワイヤで歌っている英語を，違ったものとして捉える傾向があるようだ。それは英語そのものの差異ではなく，英語を使用する側の動機づけの違いと言えるかもしれない。調査結果から明らかなように，英語上達のためにゴスペルを始めたというケースはなく, 初めから英語の上達を期待して歌っているわけでもない。彼らの一部は英語の歌を上手に歌いたいという動機から，発音や歌詞に注目するようになり，受容的なディレクターに励まされながら上達していく。その環境が，メンバーが英語への苦手意識に阻害されることなく，楽しく学ぶことを可能にしているといえる。

ただし，これには一つの条件が満たされる必要がある。今回の結果は,「英語で歌うのが楽しいから参加している」という設問に多数が肯定的，という被験者から出てきたものである。つまり彼らは英語への動機づけという条件が満たされている群である。被験者の考える「本物のゴスペル」は, 塩谷のアンケート回答者と同様, 黒人教会の礼拝やマスクワイヤのコンサート風景のイメージを伴っている。本物と同じように歌いたいという憧れがあるとき，歌詞が英語であることは積極的な意味をもつ。よって英語で歌うことを楽しいと感じ，上達への意欲も生まれやすいのである。後述するが，クワイヤメンバーの共有するゴスペルのイメージが,「黒人の宗教音楽」から変化していった場合は，英語の歌に対する態度も変化していくことになる。

クワイヤディレクターに関しては，メンバーとの信頼関係作り，歌詞のメッセージの共有・理解，そして効果的な指導に努めていることが明らかになった。印象的だったのは，音楽的素養，発音，リズム等のレベルが様々なメンバーの集まるところで，参加者全員が楽しく歌うことができるよう献身的な努力をしており，ディレクターがいわば「集う人々に仕える羊飼い」となっていることであった。今回訪問したいくつかのクワイヤでは，ディレクターのこの姿勢が個々の参加者のニーズを満たし，楽しいと感じさせ，ディレクターや他のメンバーとの連携を生み，クワイヤが一つの共同体として育っていく，というダイナミクスを見ることができた。

5.2. 教会ベースのゴスペルクワイヤの意義

これまで明らかになった,日本人が感じるゴスペルの魅力（高揚感,解放,一体感,癒し，楽しさ等），その源泉は何であろうか。クリスチャンであれば簡潔に，祈りと賛美による神とのコミュニケーションがゴスペルであるから，解放や喜びがあるのだと答えるかもしれない。ゴスペルのルーツを重んじる者は，音楽の中に神への叫びと信頼が込められており，それが歌う者の心に響き，感情に訴えるから魅力的なのだと答えるかもしれない。

しかしクリスチャンでないクワイヤメンバーは，これらの答えに困惑するのではないだろうか。言葉にはしなくとも,「クリスチャンでなくてもゴスペルを歌っていいのだろうか」という戸惑いや,「自分が得た解放感，癒しといった変化は，どこから来たのだろう」という問いは，信者でないメンバーの中にある（塩谷のアンケート参照）のだが，その解決は押し付けられるものではなく，自ら探っていくものとして「そこにある」のが，クワイヤという共同体である。教会ベースのクワイヤの特質は，集う理由が純粋に楽しむためでも，心の変化を感じるためでも，神を賛美するためでも，全て受け入れられるという点である。ゆえに，クワイヤの指導者はゴスペルのメッセージを皆が理解することを目標に置きながら，メンバー個別のニーズも大切にし，信仰を持つ者も持たぬ者も一緒に歌って感動を分かち合えるよう，リードしていくことになる。これは，音楽教室のゴスペルクワイヤでは不可能なことであろう。

5.3. 世俗の音楽としてのゴスペル

前述の野澤（2006）で問われていたことだが，ゴスペルが歴史との相互作用によって変化し，21世紀に入って新しいスタイルが生まれているとの指摘を，どう考えるべきだろうか。北米における変化は本稿の範囲を超えるが，日本のゴスペルの今については，短く言及しておきたい。

今調査では取り上げなかったが，歌詞が日本語のゴスペル曲は，既に日本のクワイヤに定着しつつある。さらには，ラブソングや民謡などをゴスペル風にアレンジした曲も,登場している。ゴスペルに特徴的なコード進行や形式を持つ「世俗の曲」は，実は多く存在しており，それらがゴスペルと分類されることもある。指導者とメンバー（共にクリスチャンではない）＋日本語の曲（歌謡曲のアレンジ）＋チャリティコンサートが目的,といったクワイヤも多数生まれている。これはいわば,「黒人奴隷の，神への魂の叫び」というルーツを持たない，自分たちの言葉と文化に即

した（よって宗教色のない）ゴスペルクワイヤを作ろう，という動きである。例えば複数の拠点を持ち総勢千名というクワイヤでは，「ゴスペルは曲ではなく歌うその人自身」という信条から，ゴスペル以外の曲も歌っているという。この日本化されたゴスペルを，形骸化した，似て非なるものとするのか，あるいはゴスペルの文脈化による変種と見るのかは，意見の分かれる所であろう。

5.4.　21 世紀の教会ベースクワイヤの課題

20 世紀にメディアで取り上げられ，注目を浴びたゴスペル音楽は，大きく変化していく運命にあった。さらに今はインターネットの動画サイトで，一番古い時代のゴスペルから，今日行われたコンサートの模様まで観ることができる時代である。今後より多くのクワイヤで，ゴスペルの様々なかたち，黒人霊歌から最近の「変種」までが受け入れられるようになることは確かである。これを書いている時点も変化の過渡期にあるとすると，今後ゴスペルと呼ばれる音楽が，発祥地北米のみならず世界各地で変化し，その変化がまた新たな変化を触発するということが十分予想される。日本の教会でクワイヤに集う人々も，より多様化したゴスペルのかたちが受け入れられることを期待するだろう。そのとき指導者たちは，何がゴスペルなのか，その定義は何なのか，という問いの答えを迫られることになる。たとえ「教会で歌われてきた賛美がゴスペルである」という保守的な立場の教会クワイヤであっても，この多様化の流れを全く無視することは難しいのではないだろうか。

6.　おわりに

今回は首都圏の一団体，教会ベースの４クワイヤに対する調査であったため，その結果を一般化できないことも多くあった。その限界を踏まえたうえで，日本の教会ベースクワイヤの現在と今後の可能性について，私見を述べた。しかし地域や団体の特性によっては，同様の調査を行っても異なる結果を生む可能性がある。今後は他地域・団体のゴスペルクワイヤとも交流を深め，さらに正確・詳細な全体図を描くことを目指したい。

[参考資料]

ヘイルバット, アンソニー　中河伸俊・山田裕康・三木章子訳 (2000)『ゴスペル・サウンド』ブルース・インターアクションズ (Heilbut, Anthony［1971］*The Gospel Sound*. New York: Simon & Schuster)

門田修平（2007）『シャドーイングと音読の科学』コスモピア

塩谷達也（2003）『ゴスペルの本』ヤマハミュージックメディア

野澤豊一（2006）「変貌するゴスペル・ミュージシャンシップ―主流教会とペンテコステ派教会間の相互関係から」『金沢大学人間社会環境研究』（12）: pp. 61-77

（2011）「ゴスペル誕生から現在まで」『ブルース＆ソウル・レコーズ』（98）: pp.22-93. ブルース・インターアクションズ

三井徹・高比良望（2001）「ゴスペル人気が疑問視する合唱教育の意味と意義」『金沢大学教育学部紀要』（50）: pp. 1-10

レヴィティン, ダニエル・J　西田美緒子訳 (2010)『音楽好きな脳』白揚社 (Levitin, Daniel J.［2006］*This is Your Brain on Music*. New York: Dutton, Penguin Group [USA] Inc.)

レヴィティン, ダニエル・J　山形浩生訳 (2010)『「歌」を語る』ブルース・インターアクションズ (Levitin, Daniel J. [2008] *The World in Six Songs*. New York: Dutton, Penguin Group [USA] Inc.)

Brown, James D. (2001) *Using Surveys in Language Programs*. New York: Cambridge Univ. Press.

Dornyei, Zoltan. (2001) *Teaching and Researching Motivation*. Eseex: Pearson Education Ltd.

Dornyei, Zoltan. (2003) *Questionnaires in Second Language Research*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.

Nunan, David. (1992) *Research Methods in Language Learning*. New York: Cambridge Univ. Press.

『Hallelujah Gospel Choir（HGF）ウエブサイト』〈http://hgfjapan.com/home.html〉2013.1

『ゴスペルサークル紹介マップ』〈http://www.eyeii.net〉2013.1

塩谷達也「ゴスペルクワイアアンケートプロジェクト」『Hush Harbor ― The House of Gospel』〈http://www.hushharbor.net/book/q03.pdf〉pp. 1-15. 2013. 1

「日本にゴスペルを広める」『ラッカー・ゴスペル・ミニストリーウエブサイト』〈http://www.ronruck.com/j/articles/19990425.html〉2013.1